慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	著者リプライ：『小倉祇園太鼓の都市人類学：記憶・場所・身体』書評論文リプライ
Sub Title	
Author	中野, 紀和(Nakano, Kiwa)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2009
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.14 (2009.) ,p.133- 135
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20090000-0133

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

著者リプライ

『小倉祇園太鼓の都市人類学―記憶・場所・身体―』書評論文リプライ

中野　紀和

はじめに、拙著『小倉祇園太鼓の都市人類学－記憶・場所・身体－』に、多忙なお時間を割いて、大変丁寧で有益な書評をしてくださった有末賢氏に心より感謝を申し上げたい。

有末氏は、サブタイトルの「記憶・場所・身体」の３点を軸に課題を指摘してくださった。小倉祇園太鼓という祭礼をメインタイトルに掲げているが、私自身の関心はむしろサブタイトルのほうに表れているといえる。その点を汲んでくださったことは、今後研究を発展、深化させるうえでもありがたかった。

課題は以下の３点であった。①身体を通したジェンダーとセクシュアリティのさらなる分析の必要性、特にライフヒストリーの聞き取りを介して、調査者である聞き手と語り手との「身体」レベルの関係性への言及の必要性、②太鼓を通して表出される都市空間に対する人びとの認識を示すために用いた場所性と非場所性に加え、地域性（locality）を入れることの提案、③「記憶」と世代的経験がどのようにかかわりあい、同世代にどのように共有されるのかといった、記憶と世代の関連への論及の必要性であった。これらの課題はすぐに答えられるものではなく、むしろご指摘頂いたことであらためて考える機会となった。そこで、拙著の基となったフィールドを振り返りつつ、考えていることを述べてみたい。ただし、各課題にそれぞれ答えるというよりは、関連させながら述べることでリプライとさせて頂いた。

拙著の構成は大きく三部からなっている。従来の祭礼研究を踏襲した第Ⅰ部と、ライフヒストリー・アプローチを試みた第Ⅱ部の間には、大きな視点の転換がある。本書で取り上げた中田氏との出会いである。調査中の偶然の出会いであったが、この出会いが私をライフヒストリーへと誘ってくれた。祭礼におけるライフヒストリー・アプローチの可能性に目を向けたことで、それまでの調査で出会った人びとを別の視点から見ることになった。中田氏の話を伺ったときに、戦争や創作太鼓をめぐる周囲との確執に話が及ぶと、彼の感情がわきあがってくるのを目の当たりにした。「他者」と向き合うとき、語り手も聞き手も自文化のなかで日本語を介したコミュニケーションをしていても、世代も生きてきた環境もまったく異なる両者は、どこかで共約不可能性を感じている。それでも聞き手と語り手の感情が共振・交差する瞬間が表出させたストーリーであった。感情の振れ幅に多少の差はあるものの、それぞれの語り手と向き合ったときに、同様の瞬間はある。聞き手の性別、世代、関心が内容を左右したことだけでなく、語りの場でしか生み出されない（有末氏のいう）身体的介入があることも事実である。同時に、身体的介入はインタビュー全体をとおして起こるはずであるが、他の話題でなく、なぜその事

柄・出来事・その時点に顕著になるのかを、聞き手の属性を考慮しつつ問うことが重要だと考えている。

さらに、本書を通底する「記憶・場所・身体」という観点は、後述する私自身の太鼓の経験なくしては得られなかったし、第Ⅲ部のような展開にはならなかっただろう。身体をめぐる認識に関心を抱くようになったきっかけは、私を介して生じたある出来事であった。調査中に太鼓を教えてもらったときのことである。祭礼当日には、拙著で取り上げた室井氏が生活する町内に参加して打たせて頂いた。結果は大失敗であった。歩きながら打ってみると、リズムがうまくとれないのである。それでも、停まっている山車の太鼓ならば、なんとか形になった。打法を教えてもらうチームには、「正調」を打つ、旧来の町内を単位としつつも自由に外部の者を受け入れてくれるチームを選んだつもりであった。しかし、この場面を見ていた人びとが、私の打法について、どこの打法か（城下町の東か西か）、誰の系統に属する打法か、どこで打つのか（祭礼か舞台か）、口ぐちに語りだしたのだ。頭でわかっていたはずの知識や彼らの語りの意味が、スッと身体レベルでわかった瞬間であった。同時に、それまでばらばらであった知識や資料が、一点に集約された瞬間でもあった。サブタイトルの「記憶・場所・身体」は、まさにその集約された先に浮かびあがってきたといえる。

身体とジェンダーについて、もう少し触れておきたい。拙著では、「身体の統制」に重点が置かれており、「身体の爆発」にはほとんど言及していない。統制されつつも、公的な空間（道路や繁華街等）でパフォーマンスすることの快感や充足が、身体の爆発へとつながっていく可能性は否定できない。近年、若者たちにはやっている「よさこいソーラン」等はその典型でもあろう。他の祭礼やイベントとも比較しつつ、今後は物理的な装置としての都市空間という軸を加味して考察する必要があるように思う。

セクシュアリティについては、女性の視線を意識する若い男性の意識（第 3 章）、女性の太鼓打ちに注がれる同性の視線を通して表出される階層差（第 11 章）といった点には言及したが、ライフヒストリーの分析のなかでは、有末氏のご指摘のとおりほとんど言及していない。これは、とくに女性の場合、語り手の世代にかかわっているように思う。神社を中心とする伝統的な都市祭礼において、女性が積極的に表舞台で祭礼とかかわるようになったのは、全国的にみて 1980 年代以降のことである。小倉祇園太鼓も、（それまでも特例はあったが）女性の太鼓打ちが登場したのは 80 年代であり、その多くが 10 代後半から 20 代にかけての若い女性であった。つまり、戦前戦後にかけて生まれた女性たちの大半は太鼓に触れず、ましてや、打つといった行為を通じて太鼓を身体化するプロセスをたどっていない。それが聞き手である筆者との対話にも反映されている。

祭礼に関して言えば、世代的経験はジェンダーによって異なってくる。ジェンダーという概念を用いるにあたっては、祭礼においても男女の二元論に収斂するのではなく、それを捉えるコンテクストが重要となることを意識しておきたい。世代や階層、教育等の違いによって、期待されるふるまいや、そのふるまいに対する視線のありかたも異なる。さまざまな要素が絡み

合っていることを意識したうえで、ジェンダーについて「語られないこと」自体を問題化し、男性３人の語りとあわせて、この点はもっと深く論及すべきであった。

世代的経験は、課題③とも重なる鍵概念である。これは、有末氏のご指摘により、あらためて意識した概念であった。本書では、まったく触れていないわけではないが、世代の相違に対する論及が希薄であったことは否めない。しかし、世代という括りだけで論じてしまうことにも注意しなければならないだろう。同じ世代であっても、そこには教育・生活環境の相違からくる多様な層がある。かつては、同じ世代に属する者であっても、祭礼参加にあたっては、居住空間やジェンダーによって暗黙の規制を受けていたのが、いまや教育や生活環境等といった別の要因によって、祭礼とのかかわりに変化を生じさせている。そのなかで、中心的担い手となっていく新しい世代にとって地域とは何なのか、彼らはどのような「地域性」を表出するのか、といった問題が重要となるだろう。

都市空間を場所と認識する者もいれば、非場所と認識する者もいる。前者は「地域性」を肯定し、太鼓に民俗を見出し、後者は「地域性」を否定し、太鼓に意味を見出さない。しかし、両者の境は絶対的ではない。なぜなら「地域性」は、空間に依拠したり、メディアのイメージやシンボル化されたモノに依拠しながら生み出され、多様に変化するからだ。それを新たな担い手世代がどう受け止めるのか、「戦術」という観点から見ることも可能だろう。有末氏に指摘された「場所性と非場所性の間に地域性を加える必要性」を私なりに理解し整理してみたのだが、けっして一枚岩ではない「世代」という軸とも絡める必要があることを痛感している。

最後に、このリプライを書くにあたり、研究の転換点を振り返ったときに、調査者の経験知や性別によって、視点も見える内容も変わってくることをあらためて実感している。人類学は、そのなかで観察・実感したことを学問的文脈にもってくるという、自らの足場から立ち上げていく強みをもっている。拙著で描いたのは、私の立ち位置からみた都市祭礼の「統合的世界」であった。人類学・民俗学を基盤としている拙著に、社会学の観点からの論評を頂き、異なる角度から考えるヒントを与えてくださった有末氏にあらためて感謝したい。

（なかの　きわ　大東文化大学経営学部）